

【展示室3】 <新収蔵品展> 作品リスト

周南市美術博物館
学芸課

期間:9月3日(火)~29日(日)

月曜休館 ※ただし9月16日,23日は開館。9月17日,24日は休館。

寄贈作品...◆ ※展示順とは異なります。

新収蔵作品							
NO.	部門	作家名	作品名【よみ方】	点数	制作年	材質(形状)	サイズ(縦×横 cm)
1	美術	宮崎進	遷東B	1	1950~1960(昭和25~35)年代	油彩・キャンバス	72.7×116.7
2		〃	TORSO	1	1999(平成11)年	ミクストメディア・和紙	95.0×77.5
3		〃	雑誌「新潮」表紙原画 ◆	6	1980~1981(昭和55~56)年	80年表紙作品(水彩・紙) 81年表紙作品(油彩・キャンバス)	
4		〃	室内 ◆	1	1972(昭和47)年	油彩・キャンバス	22.0×28.0
5		〃	室内 ◆	1	1972(昭和47)年	油彩・キャンバス	24.5×33.5
6		〃	パリ、リシー付近 ◆	1	1974(昭和49)年	油彩・キャンバス	33.0×53.0
7		〃	地上 ◆	1	1973~1974(昭和48~49)年	油彩・キャンバス	22.0×28.0
8		〃	風景(川瀬の家) ◆	1	1972~1974(昭和47~49)年頃	油彩・キャンバス	33.0×41.0
9		〃	スケッチ類 ◆	14			
10		長谷川利行	荷車のある風景 ◆	1	1933(昭和8)年頃	油彩・紙	24.0×33.2
11		堀口泰造	若い捕虜 ◆	1	1960年代末~1970年代	ブロンズ	高23.5
12		森寛斎	名花十友図巻【めいかじゅうゆうずかん】	1	制作年不詳	絹本着色	20.6×132.0
13		〃	藤花颯図【とうかいたちず】 (双幅の内の右)	2	1848(嘉永元)年	絹本着色	(右幅)102.2×41.0
			柿小禽図【かきしょうきんず】 (双幅の内の左)				(左幅)102.2×41.0
14		小田海僊	漁樵山水図【ぎょしょうさんすいず】	1	1853(嘉永6)年	絹本着色	144.5×70.7
15		大庭学僊	尉姥図【じょうばず】 (双幅)	2	江戸時代末頃	絹本着色	(左幅)105.5×35.4 (右幅)105.3×35.4
16	〃	双鹿図【そうろくず】 ◆	1	制作年不詳	紙本着色	135.5×65.1	
17	歴史	毛利元徳	毛利元徳和歌「さくらはな」	1	1896(明治29)年	紙本墨書	20.8×18.0
18		児玉源太郎	児玉源太郎三行書	1	不詳	紙本墨書	134.9×47.4
19	写真	藤岡亜弥	「川はゆく」 ◆ ※70点のうち10点展示	10	2017(平成29)年	銀塩紙	

計19件

計 48 点

作家略歴

宮崎進
(1922-2018)

洋画家。徳山町(現・周南市)御弓町生まれ。1942(昭和17)年日本美術学校油絵科卒業、同年入隊、戦後捕虜となりシベリアに抑留される。復員後、上京。1957(昭和32)年から1972(昭和47)年まで光風会展に出品。1961(昭和36)年光風会会員。1967(昭和42)年第10回安井曾太郎記念賞。1972(昭和47)～74(昭和49)年渡仏、帰国後はアトリエを鎌倉に移す。1990(平成2)年山口県選奨、1995(平成7)年小山敬三賞、1998(平成10)年芸術選奨文部大臣賞、第47回神奈川文化賞。1999(平成11)年「所蔵品による宮崎進展」、2005(平成17)年「宮崎進展 生きる意味を求めて」(周南市美術博物館)開催。2009(平成21)年から周南市美術博物館名誉館長をつとめた。2018(平成30)年死去、96歳。

長谷川利行
(1891-1940)

洋画家。京都府生まれ。1919(大正8)年歌集《長谷川木葦集》を私家版として出版。1921(大正10)年に上京し、大衆小説を書きながら絵画制作に没頭。度重なる落選の後、帝展、二科展に入選。1927(昭和2)年二科展で橋牛賞を受賞。画家としての才能を開花させたが、生来の放浪癖から、極貧のうちに49歳の生涯を閉じた。その激しく大胆な色調と筆触とによって日本のフォーヴィズムを代表する一人といえる。

堀口泰造
(1916-1999)

彫刻家。東京生まれ。1961(昭和36)年彫刻家菅沼五郎に師事。1962(昭和37)年から二紀展に出品。1966(昭和41)年二紀会彫刻部同人。1969(昭和44)年「カルメン・シリーズ」発表。1970(昭和45)年、二紀会会員。1975(昭和50)年第29回二紀展文部大臣賞受賞。1977(昭和52)年二紀会退会。1980(昭和55)年「第1回高村光太郎大賞展」(彫刻の森美術館)優秀賞受賞。1984(昭和59)年仙台市体育館レリーフ《燦 Sun》設置。埼玉県立近代美術館《トルソ》収蔵。

森寛斎
(1814-1894)

幕末明治期の日本画家。長州(萩)藩士石田伝内道政の三男として生まれる。京都で森徹山に師事。徹山の養子となる。幕末には国事にも奔走し、勤王志士とも交流があった。1880(明治13)年京都府画学校出仕。1882(明治15)年第一回内国絵画共進会銀賞受賞。1890(明治23)年第三回日本美術協会展「後赤壁図」銀牌。同年帝室技芸員。明治期京都画壇の重鎮。

小田海僊
(1785-1862)

江戸時代後期の画家。周防富海の回船業河内屋に生まれ、下関の紺屋小田家の養子となった。名は羸、字は巨海、通称良平と言う。南豊・百谷・百合・海僊と号す。22歳の時、京都に上り四条派の松村呉春の門に入り、頼山陽に教えを受けて南画に転じた。1824(文政7)年、萩藩に絵師として召し出され、1826(文政9)年より再び京で活動した。中国元・明時代の古画を研究し、独自の画風を確立。人物画を得意とする。

大庭学僊
(1820-1899)

日本画家。徳山の刀工三好與次兵衛の次男として生まれる。11歳で徳山藩の御用絵師朝倉南陵に師事し、南江と号す。のち京都に出て、小田海僊に師事し学僊と改名。独立し、萩で町絵師として活躍。維新後、東京に移り、南北両派を合わせ独自の画風を創り、山水・花鳥画を得意とした。第1回内国絵画共進会審査員。明治宮殿杉戸絵の制作にも参加。晩年長府、下関へと移り住み、80歳で死去。

毛利元徳
(1839-1896)

徳山藩主毛利広鎮の十男として生まれた。幼名は騷尉。1851(嘉永4)年11月、萩藩主毛利敬親の養子となり、名を広封とした。ついで1854(安政元)年2月、賀養子となり世子、従四位下、侍従、長門守に叙爵され、定広と改名。1868(明治元)年家督を相続し、山口藩知事となった。1871(明治4)年6月東京に移住、7月廃藩置県に伴い知事を辞任。1877(明治10)年5月第十五国立銀行頭取、翌年同取締役、1884(明治17)年7月公爵、1890(明治23)年貴族院議員となった。

児玉源太郎
(1852-1906)

陸軍軍人、政治家。徳山藩士児玉半九郎の長男として徳山の本丁(現・児玉町)に生まれる。1859(安政6)年、藩校興讓館に入学。戊辰戦争では献功隊の半隊司令として東北、函館を転戦。維新後は兵学寮に入り、卒業後に参謀として佐賀の乱、西南戦争などの反乱鎮圧で活躍した。1887(明治20)年には陸軍大学の初代校長を務め、日露戦争開戦後は満州軍総参謀長として大陸に渡り、日本陸軍の勝利に貢献した。政治面でも手腕を発揮し、陸軍大臣、文部大臣、台湾総督などを歴任。日露戦争終結後、脳溢血で急死。

藤岡亜弥
(1972-)

広島県呉市生まれ。1994(平成6)年日本大学芸術学部芸術学会奨励賞受賞、日本大学芸術学部写真学科卒業。その後、1997(平成9)年に台湾師範大学へ語学留学。2004(平成16)年ビジュアルアーツフォトアワード大賞受賞。同年、第24回写真ひとつぼ展に入選。2007(平成19)年には文化庁新進芸術家海外研修制度奨学生としてニューヨークに滞在。2010(平成22)年日本写真協会賞新人賞受賞。2012(平成24)年に帰国。2016(平成28)年第41回伊奈信男賞受賞。2018(平成30)年第27回林忠彦賞、第43回木村伊兵衛写真賞受賞。現在、広島を拠点に活動。